
我が名は 。万色を宿す心

薬剤師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が名は 。 万色を宿す心

【Nコード】

N7258L

【作者名】

薬剤師

【あらすじ】

少女は目覚めた。そこはひどく暗く、静かなところだった。自分が何なのかわからず、今日も少女は歩く。だがついに自分の姿を知った時、少女は感じた。『もう少しだけ、知らずにいたかった』と。

此処は何処だ？

ワタシは誰だ？

何故、何も覚えていないんだ……？

ワタシは歩いた。同じ場所に留まっても意味はなからう。ならば、須らく前に進むべきだ。

歩きながらワタシは考える。自分とはいかなる存在なのか。一体何の為に在るのか。考えれば考えるほど謎だ。そんな時に不図、自分を眺めた。

ワタシは金糸の模様が入った、帯まで白い和服を着ている。因みにその白は降ってくる雪のように純白だ。これは金模様が中々に美しい着物だが、はっきり言えば死に装束のようで不気味だ。それにワタシは人形のように色白なので、益々そう思ってしまう。

髪は長いな。たゆたう感じがするし、腰の辺りまである。細かい髪型は分からないが、白髪なのか……やはり色は白だ。さらさらで、光をつけては煌めき、輝いている。なのでワタシにはむしろ銀色に見える。ん？ ああ、こんな色をした犬がいたな。

これらのことから、ワタシは真っ白だということが分かった。

ワタシは幽霊……なのだろうか。

目覚めてから3日目、ワタシは見た。店の硝子に映る己の姿を。

ワタシは真っ白などではなかったんだ。ワタシはすっかり、白以外の色も持っていたんだよ。

ワタシの瞳は、黒かった。

そういえば、いつだったか聞いた話にこんなものがあつたな。

『白は染まりやすい。故に最も冒されやすい。そのためか、いつしか白には反射という特技ができた。だから白は全てを反射する。しかし、やはり何色にでも変わる色でもある』

『黒は深い闇だ。その闇は何色にも染まらず、つねに孤独だ。そんな黒はいつしか他を欲した。そして、黒は吸収する色へとなることが叶った。黒は光を 全てを吸収する色である』

ワタシは白黒だ。写真、のように。ただ白が異常に多いがね。

反射し続けるのはカラダ軀。

吸収し続けるのは瞳。

……嗚呼、今更気付いたよ。

ワタシには視覚しかないんだ。

色白の耳は音を拾わない。この口は言葉を紡がないし、何かを味わうことはない。鼻は香を愉しまない。カラダは服を含めて感覚を持たない。

白とは、黒とは、こういう事なんだな。

遂に分からなくなってきた。ワタシは何者なのだろうか。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

いきなりだが、我が決意を簡潔かつ大胆にあらわしてみようと思う。  
死のう。

もう歩くことに疲れたし、誰にも気付かれず、誰とも会話できないというのは精神的に辛いものがある。なんせ目覚めてから既に一世

紀以上経つたのだ。

ふふ、死ぬことは怖くないさ。

ただワタシの胸にあるのは悲壮感だけだ。

己の正体すら知らず、誰の記憶に残ることもないとは、なんて哀れなんだろうと自分でも思うよ。

だがそんなことは関係ない。この丘から飛び降りるんだ。この命を絶つんだ……

「お前、何してんだ！」

え？

「やめろ、この馬鹿野郎がああッ！！！！！！」

誰かがワタシを口汚く罵り、腕を勢いよく引いた。

そして均衡を崩したソイツは、ワタシの代わりに落下してゆく。

止めなければ。

救わなければ。

ワタシはこの先後悔するだろう。

助けなければ。

だが決してアイツの為ではない。

ワタシの為だ。

ワタシの為にだ。

ワタシだって他に影響を与える、ワタシだって願望を持つ、それを証明する為に　！！

《ワタシはアイツを救う！》

ワタシはソイツを追い掛けて、丘から飛び降りていた。そしてソイ

ツの体を抱きしめ、一緒に落下していく。

「わ、お前、マジ馬鹿！　ちょ、はなせこのドアホッ！」

だが落下したワタシ達は、ふわりと地面に少し浮き、そこからストンと落ち尻餅をついた。ただ、それだけだった。

たぶん、ワタシの白が地面を反射したんだろう。成る程、ワタシは投身自殺はできないというわけだ。

……何？

ならば、何故ワタシはコイツを抱くことができた？

何故コイツはワタシを引つ張れたんだ？

何故コイツの声は、ワタシに届いたんだ？

白い肌も服も耳も…コイツの前では意味がない、ということなのだろうか？

もし本当にそうなら、コイツこそワタシがワタシを知るための……

「この馬鹿女！」

……！？

「何であんな所に居んだよ。フツツにさ、どう考えても死ぬだろ。アホかお前。脳みそ御花畑かつーの」

コイツ……いや、この少年の口調には、激しい苛立ちを感じるな。

「とかるでお前、名前は？」

そんなこと聞かれても、ワタシは声など出せない。困ったな。答えようがないじゃないか。地面には弾かれてしまうから書けないし。

「ああ？ お前アレか？ 人に聞くなら先ず自分から名乗れって奴か？ 俺の名前は桜乃宮悠一だ。変な苗字は気にすんな」

悠一：だったか？ 何やらワタシに期待の目を向けているな。ワタシは全て弾かれてしま　！！  
そういえばあつたじゃないか。  
ワタシを弾かない場所が。

「ん？ なんだその手の動き？ 俺に後ろ向けってか？ 命令すんな馬鹿」

悠一は暴言を吐きつつも後ろを向いてくれた。作戦通りだ。  
ワタシは悠一の背中に、指で文字を書いた。  
それはワタシを弾かない、悠一にだからできることだ。

「ひつ　！　い、いきなり触、ん、な……」

『すまない』

『ワタシは』

『ことばを』

『はなせない』

「え、マジかよ？」

『ほんとうだ』

「ふーん。そりゃあ大変なことだ……ああ、お前、簡単なヤツだったら漢字使ってもいいぜ？」

『有難う』

「いや、それはムズい。今は話しの流れでなんとなく分かったが」

『ゆーいちほ』

『やさしい奴だ』

「なっ　　な、なに言ってるやがる……この……馬鹿やろ……」

それからワタシは、自分の全ての身の上を書き伝えた。物凄く時間がかかったが、悠一は最後まで聞いてくれた。

そして、また明日此処で会おうと約束した。

なんだかその日は不思議だった。ワタシに有るのかも定かではない心が、温かいような感覚がした。

悠一には、不思議な力があるのかもしれない。

~~~~~

~~~~~

「なあ、お前は名前がないんだろ？」

ワタシは頷いた。ハイかイエエかはこうして伝えたほうが早い。

「俺達が出会ってもう半年も経つんだぜ？　名前がないっつーのは辛くねえか？」

ワタシは首を振る。名前なんてなくてもいい。



「俺考えたんだけどさ……“愛”ってゆーのはどうだ？」

『あい？』

『なぜだ？』

「いや、特別深い意味はねーんだけどよ。なんかお前って、愛…みたいじゃね？」

『白くろの私がか？』

『おかしなことを言うな』

「……ハッ。だよな。だけど名字は桜乃宮でいいんだぜ？」

『告白か？』

「冗談だ。んなわけあるか。じゃあ、また明日な」

悠一は手を振り、走り去っていった。心なしかその顔が赤かったの  
で、見ているワタシが照れてしまった。

それにしても「愛」だなんて……悠一は面白い奴だ。

「よっ」

気が付いたら悠一がいた。ワタシは寝てしまっていたらしい。

いや、なんだ…？ 何かひっかかる。何がひっかかるのか、と考えたら、それは悠一だった。

悠一が真っ赤になっている。

「俺……さ。お前に言っていてえことがあるんだ。今日、絶対言っつて  
決めたんだ。聞いてくれっか？」

とりあえずワタシは頷く。

「……そっか。サンキユ。俺、俺な？ お前のことが」

ッ！！

言うな悠一！

言つては駄目だ！

それを口にしたら、ワタシは、ワタシ、は……消える。

だがワタシはまだ悠一と一緒にいたいんだ！

ずっと一緒にいたいんだ！

嫌だ、悠一と別れたくない！

「俺は」

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

まだ消えたく、ない……！

「俺は、お前が好きだ。愛してる」

その刹那、ワタシは光った。そして段々消えていく。砂が風にも  
飛ばされるように。

目の前にいる悠一の驚きで歪んだ顔を見て、ワタシは泣き出しそ  
うになる。

『……悠一、ワタシは「愛」だったんだ。自分を知った今、もうこ  
の世に具現化できない……』

「ば、馬鹿なこと言うなよ！ 冗談きついぜ？ だって、せっかく告白したつてのに……！」

『すまない。だが、忘れるな。悠一が愛を感じたとき、ワタシは必ずそこにいる』

「でも…でもよ、愛！」

『ワタシは悠一が、大好き、だ……』

「愛ーっ!!」

ワタシは一瞬だけ鮮やかに色付き、悠一にきすをした。

そうだ。そう、だった。

ワタシは愛だった。

しかし愛が消えていく世の中で、自分を段々忘れ、ついに人間の背格好を真似たのだ。

誰かに心から愛してもらうために。

ワタシは白黒なんかじゃなく、万の色を宿した心だったんだ。

今はしっかりと、そう思える。

我が名は愛。

人間の、尊い心。

愛が消えてから、悠一は退屈な日々を過ごしていた。共にいたのは半年だけだったのに、愛がない今は、毎日のように虚無感が心に押し寄せる。

それは自分の肢体を失ったような、やる瀬ない感覚だ。

悠一は愛が消えてからも、愛と会っていた場所に来ていた。それは何時しか習慣となり、今では当たり前のこととなっていた。

「……………愛……………」

ぼつり、と口から愛しい人の名前がでる。

当然、呼んでも振り向く者はいない。分かってはいるが、現実を無理矢理見せられたようで、ズキンと心が痛む。

「……………愛……………」

鼻声になりながらもまた、名前が口から勝手にでる。目の前の景色が滲み、頬に温かい雫が伝った。

「……………お前は何故、泣いてる……………」

「……………?……………」

「悲しいことでもあったか? ワタシでよければ、話を聞こう……………」

「……………!! あっ、あ……………」

「どっした? 悠……………」

「……………愛……………」

悠一の濡れた顔は花が咲いたような笑顔に変わり、再び悲しさで歪むことは、その後二度となかった。

(後書き)

最後の、『愛』が何故また悠一に会えたかについては、ご想像にお任せします。

ただ悠一が悲しさのあまり発狂して、幻覚を見たわけではないです。

よろしければ感想・意見などを書いてくれると、嬉しいです。  
最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7258/>

---

我が名は 。万色を宿す心

2010年10月8日21時55分発行